

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2004	382	甲 ㊟1898

## 博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

### 松原朗「中国離別詩の成立」

本論文は、中国古典詩における〈離別〉を主題とした作品が、どのようにして成立し、また発展していったかを、具体的な詩歌の分析を通して考察したものである。

考察の主要な対象は、六朝期から唐代中期（大暦・貞元年間）に到る数百年間に作られた詩歌であり、それは中国文学史における古典詩の最も隆盛を極めた時期にあたる。従って、この期の詩歌については、詩人論にせよ、作品論にせよ、あるいは様式論、典故論にしても、先人の研究成果が内外ともに豊富に蓄積されているが、〈離別〉という主題に絞って本格的に考察して一書としたものはなく、その意味で論者の設定した新しい視点とそこからなされる中国文学史上の数々の指摘には大いに評価できるものがある。

論者は、まず離別詩の形成段階として、後漢末の建安期と、続く西晋・劉宋の三つの時期を初期段階として論じる。この中で、五言詩の成立などによって文学史上重要な位置にあるとされてきた建安文学の中では却って離別詩は見られないこと、西晋時期に入ると、官僚の外地への赴任の機会に催される祖餞の宴において祖道の詩が自覚的に一定の「様式」をもって作られるようになることを指摘し、これを「離別詩」の開始だとする。次の劉宋の時代には、鮑照がそこに離別の悲しみを直接盛り込み、また具体的なその場の景物を取り込むことによって臨場感をもたせて作るようになることを指摘し、論者は、これを以ってこれ以後の「離別詩」の最初の完成した形とする。

続いて、南齊の永明期において、文人たちの詩篇唱和の風が盛んになると、その中心的な詩作の一つに離別を主題としたものが増えること、またその反面、作品の表現に一定の類型化が見られることなどを指摘する。そこで、梁の何遜は別れに伴う悲傷の情感を強調する表現をここにもち込むことで、六朝期の離別詩の一つの頂点を極めたと論じる。

唐代に入ると、初唐の四傑の一人とされる王勃によって送別の宴席において「送別の詩集」に冠する「送序」なる文が大量に作られるようになり、それに伴って、作詩にあっても、送る側と送られる側とがはっきりと分けられ、離別詩における「送別」「留別」の分化が促されたことを指摘する。離別送別の詩の分類は、はやくは明の張之象の『古詩類苑』『唐詩類苑』などにおいて試みられているが、両者の分化の文学史的意味を明確に論じ、これを論理的に説き明かしたことは、本論文の新しい成果として評価できる。

さらに、この事実に基づき、王維の送別詩を分析し、それらが五言律詩を標準とし、旅立つ者の前途の風景を配し、励ましの言辞を加えるといった典型が創り出されたことをいう。これは今日の文学史において、半ば隠遁者風の詩作の部分によって評価されることの多い王維が、玄宗朝においては宮廷詩人としての高い評価を得、「天下の文宗」と評され

ていたことの意味を改めて考えさせる指摘である。また、論者によれば、離別送別の詩は王維によって確立されたこととなる。

こうした「離別詩」の形成の過程を見てくると、従来公宴の場で作られた詩は、類型的・儀礼的なもので「千篇一律」だと低く評価されがちであったが、伝統詩の制作にとってははなはだ重要な場であり、そこから優れた詩の数々が生み出されたことが、論者の離別詩についての系統的な研究によって改めて確認されることとなった。この点も本論文の具体的な功績の一つである。

また、王維「送別（下馬飲君酒）」や李白の「瀟陵行送別」などについては、従来これらが特殊な「自送の詩」であることを指摘する学者は少なくなかったが（他の部分の詳細な注記に比して、この点への言及がないのは遺憾である）、論者は独自にいくつかの方面から推論を重ね、それらの指摘に十分な根拠を与えることとなっている。今後、この詩を解釈するに当たっては、必ずや参照すべき論拠を提示したことになる。

ただ、論者が離別詩の「成立」に重点を置くあまり、唐代中期以降の離別詩を「衰退」との認識の下に考察の対象にしていない点は、その後にも少なからぬ離別詩の名作とされるものがあることからして、なお大いに検討の余地があろう。

また、本論文が扱うのは、すべて士大夫間でかわされた離別詩のみであり、その間にも、またその後にも存在する、読む者の肺腑をえぐるような男と女、親と子の離別の詩歌の世界が念頭にない点、すなわち、平明に言えば、本来「中国における別れの歌」の意であるはずの「中国離別詩」という語をかなり限定的に使用しているようでありながら、その定義づけが忘れられている点などは、いかにも惜しまれる部分である。

しかし、それらの若干の不備は認められるものの、本論文が六朝から唐代中期にある傾向を持って集中的に作られた士大夫の間における「離別詩」を系統的に考察し、これを古典詩歌史上に位置づけた意味は揺るぎなく、今後のこの方面の研究の大きな指針となることは疑いないところであろう。

以上のことから、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と認められる。

2004年3月8日

主任審査委員	早稲田大学教授	稲畑耕一郎
	早稲田大学教授	岡崎 由美
	早稲田大学教授	高橋 良行
	弘前大学教授	植木 久行
共立女子大学教授	博士（文学）早稲田大学	宇野 直人